

-able 形容詞の項構造について *

神谷 昇

On Argument Structure of *-able* Adjectives

Noboru Kamiya

要旨

本稿は動詞に接辞 *-able* を付加することで生成される形容詞 (*-able* 形容詞) の項構造について議論する。特に、外項と内項は派生名詞において標示される前置詞が異なる事実 (Johnson and Postal (1980)、影山(1996)など)、内項が事象の尺度化に関与するという Tenny (1989, 1994) の提案、および、連鎖形成に課せられる条件 (Rizzi (1986)) に基づき、本稿は *-able* 形容詞も内項を持つことを提案する。さらに、*-able* 形容詞が内項を持つことは、Baker (1988) の「主題役割付与均一性仮説」の観点からも望ましいことを議論する。

キーワード：*-able* 形容詞、派生名詞、事象の尺度化、連鎖形成、主題役割付与均一性仮説

1. はじめに

本稿は (1) に例示するような、動詞に接尾辞 *-able* を付加することで形成される形容詞 (以下では、「*-able* 形容詞」と呼ぶ) の項構造について検討する。

(1) (un)believable, breakable, readable, reducible, washable

Williams (1981) は、*-able* 形容詞の派生には項構造における内項の外項化 (Externalize Theme ; E (Th) と略記) が関与していると主張し、例えば、*readable* の派生は (2) に示すようなものであり、基体動詞 *read* の項構造に E (Th) が適用することで *readable* の項構造が生成されるとする。¹

(2) $\text{read} : (\underline{\text{Ag}}, \text{Th}) \rightarrow E(\text{Th})$ の適用 $\rightarrow \text{readable} : (\text{Ag}, \underline{\text{Th}})$

(2) は、主題項 (Theme) が基体動詞では内項として、また、-able 形容詞ではそれが外項として統語構造に写像 (map) されることを示しているが、本稿では -able 形容詞は基体となる動詞から内項を引き継ぎ、それが内項として統語構造に投射され、主語位置に統語的に移動するという分析を提示する。より具体的には、外項と内項は派生名詞において標示される前置詞が異なるという事実 (Johnson and Postal (1980)、影山 (1996) など)、「事象の尺度化」(measuring out of an event) に関わる分析 (Tenny (1989, 1994))、および、連鎖形成 (chain formation) に課せられる条件 (Rizzi (1986)) に基づき、-able 形容詞の表層主語は内項であることを2節で論じる。また、-able 形容詞の表層主語は内項であるという提案は、Baker (1988) の「主題役割付与均一性仮説」(Uniformity of Theta Assignment Hypothesis; UTAH) の観点からも望ましいことを2節で議論する。最後に3節でまとめを行う。

2. -able 形容詞における名詞句移動

本節では、-able 形容詞は内項を持ち、それが統語部門で移動して主語になるという分析を提示する。

-able 形容詞に内項が存在する1つめの根拠としては、名詞化に関わる事実が挙げられる。良く知られているように、動詞由来派生名詞では基体動詞の外項に相当する項は *by* で、また、直接内項に相当する項は *of* で標示される (Johnson and Postal (1980)、影山 (1996) など)。このことは (3) に例示されている。

(3) the destruction *of* the ancient city *by* the Vandals

(影山 (1996)；イタリックは筆者による)

cf. The Vandals destroyed the ancient city.

(4) と (5) は -able 形容詞を名詞化した例であるが、これらの例においても、-able 形容詞の表層主語として現れるべき項が *of* で標示されていることに注意

Note and Discussion

されたい。

- (4) a. They were presented in random order, and the respondents were asked to judge the acceptability *of* the sentences.
b. The court said that it would not regard the separability *of* the information in question as being conclusive, but the fact that the alleged “confidential” information is part of a package and that the remainder of the package is not confidential is likely to throw light on whether the information in question is really a business secret.
c. The readability *of* the review itself is the paramount editorial consideration.

(British National Corpus (BNC) から；イタリックは筆者による)

- (5) For, once we have made the first approach to the Landshut Virgin and acquired a first set of impressions, the changeableness *of* the figure begins to work on us further, now less in the dimension of greater or lesser distance and more in the angle of view. (BNC；イタリックは筆者による)

(3) の事実を踏まえると、(4) と (5) の例はいずれも、-able 形容詞の表層主語として現れる項は内項であることを示している。

2つめの根拠は、「事象の尺度化」(measuring out of an event) に関わるものである。Tenny (1989, 1994) は、内項は事象を尺度化できるのに対して、外項はできないと主張している。例えば、(6a) は for an hour と共起できることからわかるように非限界的な事象 (non-delimited event) を表しているのに対して、(6b) は間接内項 (indirect internal argument) の PP が存在することから限界的な事象 (delimited event) を表している。

- (6) a. push the cart (*in an hour / for an hour)
b. push the cart to New York (in an hour / ?for an hour)

(Tenny (1989))

言語科学研究第13号 (2007年)

つまり、(6) では間接内項の有無が事象の限界性を左右している。

同様に、直接目的語が可算名詞かどうかも事象の限界性に影響を及ぼす。(7a) は直接目的語が可算名詞であることから限界的な事象を表すのに対して、(7b) はそれが不可算名詞であることから非限界的な事象を表している。

- (7) a. Charles drank a mug of beer (??for an hour / in an hour). (delimited)
b. Charles drank beer (for an hour / *in an hour). (non-delimited)
(Tenny (1989))

このように、内項は事象の限界性に影響を及ぼすが、外項が可算名詞であるかどうかと事象の限界性との間には関係がない。このことは (8) と (9) に例示されている。

- (8) a. The heater melted the candle. (delimited)
b. Heat melted the candle. (delimited)
- (9) a. Snow surrounds the house. (non-delimited)
b. Seven trees surround the house. (non-delimited)
((8) と (9) : Tenny (1989))

以上の Tenny (1989, 1994) の議論を踏まえて、(10) を検討する ((10) におけるイタリックは筆者によるものである)。

- (10) a. A Poster presentation should : have visual impact; have a clear layout; be readable *in 3-4 minutes*; be legible from 2 metres away.
([http : //helios.bto.ed.ac.uk/bto/skills/files/communication.htm](http://helios.bto.ed.ac.uk/bto/skills/files/communication.htm))
b. the user interface should be learnable *in a very short time*, for example *in 20 minutes* by a new wearer.
([http : //www.iis.ee.ic.ac.uk/~frank/surp99/report/skcc97/](http://www.iis.ee.ic.ac.uk/~frank/surp99/report/skcc97/))

Note and Discussion

design.html; “DESIGNING A WEARABLE COMPUTER” という記事の一部)

- c. A well-structured and laid out book, with a comprehensive range of recipes that should be cookable *in 30 minutes or less*.

(http://www.cookery-books-online.co.uk/acatalog/Online_Catalogue_General_42.html; イタリア料理の本の書評記事)

この例で特に重要なことは、-able 形容詞 (readable, learnable, cookable) に事象の終了点を表す *in ...* が後続していることである。別の見方をすれば、(10) の表層主語は -able 形容詞の基体が表す事象を尺度化しているということである。内項が事象の尺度化に重要な役割を果たすという Tenny (1989, 1994) の主張に基づけば、(10) の表層主語は基底構造では直接内項の位置にあり、-able 形容詞の基体の表す事象を尺度化していると言える。

ここまでの議論をまとめると、-able 形容詞は内項を持ち、それが表層では主語位置に生じていることから、統語操作によりそれが主語位置に移動しているということになる。このことは (11) に図示されている (*aP* は *v *P* と同様に位相 (phase) であると仮定する)。

- (11) a. This book is readable.

b. [_{TP} [_T is] [_{aP} [_a readable] [_{DP} this book]] (基底構造)

c. [_{TP} [_{DP} this book] [_T is] [_{aP} [_a readable] *t*_{DP}]] (スペルアウト時の構造)

↑ _____ | 移動

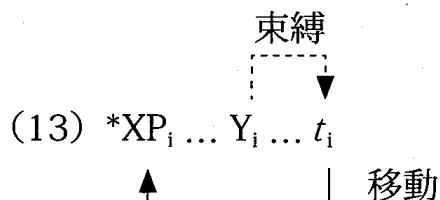
(12) に示すような、-able 形容詞に *self-* が付加できないという事実も、これまでの議論を支持する。

- (12) *John is self-shavable. (Newmeyer (1980))

より具体的には、(12) の非文法性は、連鎖形成 (chain formation) の違反に帰せられる。Rizzi (1986) は、移動した要素とその痕跡の間に、その痕跡を

言語科学研究第13号（2007年）

束縛する要素が介在する場合には連鎖形成が阻止されると主張している（Rizzi（1990）も参照のこと）。このことを図式的に表すと（13）のようになる（ただし、（13）ではYが痕跡を束縛する要素である）。



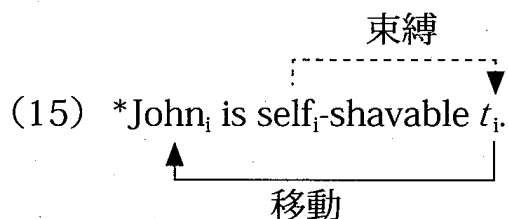
例えば、（14a）の受身文が非文法的であるのは、（14b）に示すように移動した要素 Gianni とその痕跡の間に、それを束縛する接語（clitic）の si が介在することに起因する。

- (14) a. *Gianni si è stato affidato.
 Gianni to-himself was entrusted
 Lit. 'Gianni was trusted by himself.'
- b. *Giannii [_{VP} si_i è stato affidato t_i t_i].



（Rizzi（1986）を修正）

（14a）と同様に、（12）が非文法的であるのは、移動した要素 John とその痕跡の間に、それらと同一指標を持った self- が介在するためであると考えられる。このことは（15）に示されている。²



-able 形容詞の表層主語は基底構造では基体動詞の直接内項であるという本稿の主張は、（16）に示す「主題役割付与均一性仮説」（Uniformity of Theta

Note and Discussion

Assignment Hypothesis ; UTAH (Baker (1988)) の観点からも望ましいと言える。

(16) The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (UTAH) :

Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-structure. (Baker (1988: 46))

論点を明らかにするために、(17b) に示す translatable の基底構造と、その基底動詞 translate の基底構造 (18b) を比較する。

(17) a. While this is probably translatable into Japanese, I am not sure that the proposition would be true. (Herbert Passin, 1977, *Japanese and the Japanese*, Kinseido) (竝木 (1990))

b. $[_{TP} [_T \text{is}] [_{aP} a^0 [_{AP} [_D \text{this}] [_A \text{translatable}]] \text{into Japanese}]]]$



(18) a. We can translate this into Japanese.

b. $[_{TP} [_T \text{can}] [_{v^*P} \text{we } v^* [_{VP} [_D \text{this}] [_V \text{translate}]] \text{into Japanese}]]]]]$



(17b) では基底動詞 translate が内項を2つ持つことから AP の指定部に主題項の this が、³ また、A の補部に PP が基底生成され、A の translatable は位相である aP の主要部 a に移動する。(18b) も (17b) と同様に、VP の指定部と V の補部に主題項の this と PP がそれぞれ基底生成され、V の translate は位相である v *P の主要部 v * に移動する。(17b) と (18b) で重要なのは、両者において主題の意味役割を付与されている this が構造上、同じ位置 (語彙範疇の投射の指定部) に生じているということである。このことは特定の意味役割を付与される項は統語構造上、特定の位置に投射されるとする UTAH の内容に沿ったものである。

言語科学研究第13号 (2007年)

また、-able 形容詞の派生において名詞句移動が関与しているという本稿の結論が正しければ、-able 形容詞の派生 (19) は名詞句移動が関与しているという点で非対格動詞の統語構造 (20) と類似しており、この意味において -able 形容詞は「非対格形容詞」とみなすことができる。

- (19) a. While this is probably translatable into Japanese, I am not sure that the proposition would be true. (Herbert Passin, 1977, *Japanese and the Japanese*, Kinseido) (竝木(1990)) (= (17a))

b. $[_{TP} [_T \text{is}] [_{aP} a^0 [_{AP} [_D \text{this}] [_A \text{translatable}]] \text{into Japanese}]]]$

(基底構造)

c. $[_{TP} [_D \text{this}] [_T \text{is}] [_{aP} a^0 [_{AP} t_D [_A \text{translatable}]] \text{into Japanese}]]]$

↑ 移動

(スペルアウト時点での構造)

- (20) a. The man came to the party.

b. $[_{TP} [_T \text{-ed}] [_{vP} v [_{VP} [_{DP} \text{the man}] \text{come to the party}]]]]$. (基底構造)

c. $[_{TP} [_{DP} \text{the man}] [_T \text{-ed}] [_{vP} v [_{VP} t_{DP} \text{come to the party}]]]]$.

↑ 移動

(スペルアウト時点での構造)

3. まとめ

本稿では、名詞化における前置詞の選択の違い、事象の尺度化、連鎖形成に課せられる条件に基づき、-able 形容詞の表層主語は直接内項の位置に基底生成されることを論じた。また、UTAH の観点から -able 形容詞に内項が存在することは望ましいということも論じた。そして、基底構造で名詞句が直接内項の位置に存在し、それが -able 形容詞の主語位置に存在することから、-able 形容詞の派生には非対格動詞の派生と同様に名詞句移動が関与していることを議論した。

Note and Discussion

[注]

- * 本稿を執筆するに当たり長谷川信子先生、中島平三先生、斎藤武生先生から有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝する。言うまでもなく、本稿における不備は筆者に帰せられるべきものである。
- 1 (2) において、下線を付された項は外項を、そうでない項は内項を表す。
- 2 本稿での分析が成立するためには self-shavable の self- は John の痕跡を構成素統御 (c-command) する必要があるが、このことは単語内の要素は統語操作に関与しないとする語彙的緊密性 (lexical integrity) に反するものである。しかし、本稿では self- はある種の接語であり、統語操作に関与できると仮定する。
- 3 (11b) では主題の意味役割を担う名詞句が V の補部の位置にあると仮定したが、これは基底動詞 read が 2 項述語であることに起因する。内項を 2 つ持つ動詞の場合には主題項は VP (または AP) の指定部に基底生成されると仮定する (Hale and Keyser (1993) などを参照)。(17b) では本文で述べたように translate が内項を 2 つ持つ述語であるので、主題項の this は AP の指定部に基底生成される。

[参考文献]

- Baker, M. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press.
- Borer, H. (ed.) (1986) *The Syntax of Pronominal Clitics (Syntax and Semantics 19)*, Academic Press.
- Hale, K. and S. J. Keyser (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations," in Hale and Keyser (eds.), 53 - 109.
- Hale, K. and S. J. Keyser (eds.) (1993) *The View from Building 20*, MIT Press.
- 平河内健治 (編) (1990) 『生成文法の方位』、松柏社。
- Johnson, D. and P. M. Postal (1980) *Arc Pair Grammar*, Princeton University Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』、くろしお出版。
- 竝木崇康 (1990) 「英語の接尾辞 -able」、平河内 (編)、326-357.
- Newmeyer, F. J. (1980) *Linguistic Theory in America: The First Quarter-century of Transformational Generative Grammar*, Academic Press.
- Rizzi, L. (1986) "On Chain Formation," in Borer (ed.), 65 - 95.
- Rizzi, L. (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press.
- Tenny, C. (1989) "The Aspectual Interface Hypothesis," *Lexicon Project Working Papers 31*, MIT.
- Tenny, C. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer.
- Williams, E. (1981) "Argument Structure and Morphology," *The Linguistic Review 1*, 81 - 114.